



風雨で御座居ましたが、元の様沈みまして青雲が出て参りました。小手を翳して沖を視ますと皆が乗つた來た幾多の船が粉微塵となりまして一艘も御座りまへん。皆の者は城へ歸る事が出来ません「ヤア、某の乗つて來た船が御座らん、御貴殿の船も御座らん如何致したもののじや、彼方に船が一艘 視える。其船返せ、戻せやアい……」

八丈島の俊寛みたいに云ふて居ります。流石お殿様は仲々活潑で御座ります。又候アリヤ〜と狩出しに成りました……今尾崎の先端蝦蟇ヶ淵と云ふ處へ御掛りに成ますと、約二丁程先の芦原が震動して擴がつたとかと思ひますと中から出ました煙が毒々しい妖氣で御座ります。何事ならんと視て居りますと二夕抱ひもあろふと云ふ大蛇、眼などは鏡の如く光つて居りまして、口は朱盆を二つ



大蛇

照らした様に紅の舌を出して直に一ト飲みと云ふ有様で殿様見掛て鎌首を立て進んで参りました。「誰かある、一家中の者彼れなる大蛇を射取れられ。」

と指揮して御座るが誰とて恐ろしい事は存じて居ります。

「誰人ぞ彼の大蛇を射取る人はおまへんか。」

「拙者は幼少の頃より長虫は嫌いで御座る。まこと彼の大蛇を射取る様なら、殿に碌を返納いたし町はずれで芋屋でも致すで御座る。近頃は芋が貫目何程致すで御座る。」

誰一人怖れて射取に出る者が無い。所が益々大蛇近寄つて來る殿様が乗つて御居でに成る馬が大蛇の毒氣に恐れてタヂ〜と退歩すると云ふ有様もうそうなると殿様自ら陣笠を脱ぎ捨て大蛇を毆殺